

最強チーム“浅野 JAPAN”！

「わっしょい、わっしょい！」胴上げをする声がホテルの室内に響き渡った。空高く舞い上がる巨体のインド人や細身のチベット人。生まれて初めての感覚に歓喜の輪が広がっていく。「次はあいつだ！」次から次へと胴上げ者を迎え、落とさないように細心の注意を払いながら必死で持ち上げるのは日頃、運動不足で細腕の日本人だった。時は New Year Eve の 2013 年 12 月 30 日。アイキャンプでの手術が終了したのちに行われた恒例のロータリークラブでのパーティーでの出来事だ。その時、心の底から思った。この胴上げがオペ終了後で良かったと。

今回で 14 回目となったダラムサラ・アイキャンプ。チームも岡田 JAPAN から浅野 JAPAN に代わり、メンバーも 4 人がニューフェイスとなった。経験豊富なメンバーが多く揃ったが、皆がどのようなパフォーマンスをするのか不安は否めなかった。しかし蓋を開けてみてビックリ。過去に類をみないほど手術が早く終わったのだ。開始はいつものように午前 11 時くらいだったが終わったのは午後 5 時前で、まだ太陽が水平線よりかなり高い位置にあった。もちろんトラブルもほとんどなかったからだが、そうなったのもメンバー全員がそれぞれの仕事を率先してこなしていたチームワークの良さが挙げられるだろう。もしかして最強のチームであったのではなかろうか！？

浅野キャプテンが初めてネパールのアイキャンプに参加した時に、アイキャンプのノウハウについて指導を受けた池田先生は、12 月 18～24 日までベトナムでのアイキャンプに参加し、大阪を經由してインドへそのまま来たという驚くべき行動力の持ち主だ。国内外での手術経験歴と技量が素晴らしいことは言うまでもないが、視野の広さと謙虚さを兼ね備えていた。初日の外来でのことだ。今回で 13 回目（現地在住 1 年を含め）となった私は誰よりインドの事は知っているという自負があった。現地の人たちは目のことは病気を含め知識がなく説明しても理解できないため、目を診て薬を出しさえすれば OK というような頭でいた。眼底検査用のレンズを借りようとふと横を見ると、決して病気を見逃すかという真剣な眼差しの池田先生の姿が目に入った。それを見て自分がとても恥ずかしくなり、その後は心を改めて診察と検査を行った。もちろんマクドナルドに負けないほどの最高の笑顔を添えて。またオペ室における外回りにおいて、細心の気遣いと注意を払い何が必要で何をすれば良いのか判断、行動をされており、術者だけでなく皆が動きやすいように上手くコントロールしていた。田宮さんの「池田先生が外回りをしていた時は、ほんとうに動きやすかった。」という言葉がそれを証明している。

私の大学の後輩である村松大次先生は、以前から「アイキャンプに連れて行

ってください」と声を掛けられていた。ガーナでのアイキャンプに参加した経験があるとはいえ、一緒に仕事をすることがないため彼の実力や人間性は未知数で、出発前には一抹の不安があった。しかし彼の所作を見てそれは驚くほど急速に私の中から消えていった。初めてづくし（場所、メンバー、器械、手技）のオペにおいて、冷静な判断と決断の速さで上手く自分のペースにしていっていった。懐の深さ（決して腹が出ているという意味ではない）と達観した考え方ゆえのなし得る業であり、先輩としてとても嬉しかった。

今回から決定した、術中に合併症が起きた時に独りで処理できる自信のない者には手術をさせない、というルールを承知で参加してくれた荒木先生。それでもこのアイキャンプのために日本で何回も手術の練習をして参加していた。「チャンスがあれば！」という気持ちを表に出すことなく、皆のためという姿勢と何でも吸収してやろうという熱い思いが、とても嬉しかった。その人柄はチベット人ナースからも慕われ、“ARA~KI~”と親しみを込めて呼ばれていた。ん~GOOD JOB！

村松先生と一緒に1日遅れて合流した塩入Ns。初日の“呑みニケーション”であつという間にチームに溶け込んでいった。飲み込みの速さ（酒でなく）と的確な判断と行動は、眼科手術未経験とは思えないほどで感動した。手術がスムーズに進んだ要因の一つとして彼女の存在があったことは間違いない。またそのキャラクターは皆から愛され、ロータリーのパーティーでは自ら皆に声を掛けて胴上げをして貰っていた。なお胴上げでインド人の手伝いが一番多かったのは間違いなく彼女の時だった。ん~GREAT JOB！

現地の人間から「いつも素晴らしい仕事をしてくれる Super Coordinator KODERA」と称賛され、我々がスムーズに仕事ができるように陰でサポートしてくださる古寺さん。私が泥棒だったら、あれだけ大事にバッグを抱えているのなら大金が入っているに違いない、と狙いをつけるだろう、というくらい（オペ室で顕微鏡での見え方を確認するためにベッドに寝てもらった時にもギュッと抱えていた）几帳面にお金と私たちの管理をしてくださった。チームにおけるまさにマスコット、いや大黒柱である。おかあさ~ん、感謝です。

その古寺さんから仕事を引き継いで、早くから旅行代理店や Tibetan Delek 病院、Dr. Raman Puri とコンタクトを取り、その堪能な英語と思考力で現地のスタッフからあつという間に絶大なる信頼を得た田宮さん。眼科手術に関する知識も十分に備えているため通訳としての力量も十二分で、今後いかにこのアイキャンプを前進させていくかという内容のミーティングにおいて、実りある会話ができた。まさに縁の下の力持ちです。有難うございます。

そして今回のアイキャンプ大成功の立役者は、もちろんキャプテン浅野宏規だ。このアイキャンプに向けて用意周到に準備し、日本チームの代表として皆

が仕事をしやすいように気を遣い、そして上手くまとめ上げた力量とその努力には本当に頭が下がる思いだ。正直、まさかこれほど適任だとは思わなかった。またロータリーのパーティーでのスピーチには心が打たれた。決して流暢な英語とは言えないが、熱い想いとひとを幸せにする笑みはインド人やチベット人のみならず、我々にも「さすが日本代表のキャプテン！」という思いを抱かせていただいた。ほんとうに本当に有難うございました。

さて私が今回一番印象に残ったのは、亀背のチベット人のお婆ちゃんだった。術前検査の時に背中が丸まっているため横になっても真上を向くことができず、オペは不可能であると判断し、本人と同行したナースに伝えた。ところがオペ3日目にもう一度やってきて、ほかの患者さんと一緒に椅子に座っているではないか。どうしても手術を受けると聞かないので、もう一度話してくれ、とナースに頼まれた。詳しく話を聞いてみると、先日、老人ホームに帰った後に「何で手術が出来ないんだ！見えないのだから何が何でも手術を受ける！！」とナースと喧嘩したとのこと。説明しても理解してくれないだろうと判断した私は、「ならば横になってみろ」といってベッドに横になってもらった。検査のときは異なりそれなりに真っ直ぐになっていたが、決して十分な姿勢ではなかった。しかしどうにか真っ直ぐに寝て手術をしてもらうんだ！という思いで身体をプルプル震わせながら必死に身体を伸ばしている姿勢に感動し、「よしっ、やってやろう！」と決断した。しかしいざ手術代に乗って顕微鏡を当ててみると、瞼裂は狭く（目が細く）散瞳も悪く（瞳が開かず）真っ白シロの成熟白内障、しかも偽落屑症候群と、難しい要素が満載であった。それでもお婆ちゃんの思いに応えるべく、全身全霊こころを込めて手術を行った。あの緊張感と集中力は、我ながら GOOD JOB だったと思う。翌日、眼帯を取った時どんな顔をするのか楽しみにしていたが、「見えた！」という喜びいっぱいの笑顔ではなかったが、手を合せて見せてくれた優しい表情が、手術の成功を示してくれていた。

過去の経験を踏まえ、新生ダラムサラ隊は今回、幾つか新しい試みを行った。その中の1つが、夕食時に各自がその日の感想や反省を発表することだった。自分で自分を振り返るだけでなく、皆が何を感じ何を思っていたのかが分かり、お蔭で日を追うごとにチーム力は増していったと思う。これは昨年の反省会の時に田宮さんからあった提案であり、感謝・感激・感心の三感王である。

現地からアイキャンプで超音波白内障手術の導入をして Advance を、との要望が以前よりあったが、今回カウンターパートナーの諸事情を鑑みて、早急な導入は厳しいと判断した。今まで Advance という旗印をもとに手術手技の進歩しか考えていなかったが、アイキャンプをトータルで考えた時に術後診察をよりキッチリと行うということも Advance なのではないか、と池田先生から提案があった。確かに！ ハード面での進歩には、お金や器械（顕微鏡と超音波

機器)をどのように手に入れるかの問題のみならず、現地にそれに精通した者がいないという問題があり、これらは簡単には解決できないと思われた。しかし我々日本人がもつ繊細さときめ細やかさは手術だけでなく診察でも発揮することはでき、多くの患者さんがこのアイキャンプを訪れる理由の一つであることは間違いない。今回の経験を踏まえ、さらにさらに進歩していきたいと思う。今回の素敵なメンバーと必要、必然として起きたすべての出来事、そして私たちを見守ってくださった神様・仏様に心より感謝します。有難うございました。合掌。Tashi-Delek.